



図書館との40年を思い返して

工学研究科 化学工学専攻

塚田 隆夫

私は、来年3月に本学工学部を卒業して40年を迎えます。教養部そして学部3年生の頃には、あまり図書館に縁のなかった私にとって、40年前に4年生として研究室に配属になり、卒業研究に取り組むに至って、ほぼ初めて図書館（室）を利用することになりました。研究室が片平の非水溶液化学研究所（現多元物質科学研究所）内にあったことから非水研の図書室を良く利用しましたが、当時の非水研の古びた建物の2階の奥にあった書庫の少しカビ臭い古い本の匂いが思い出されます。学部4年生から約四半世紀を、片平で学生、教員として過ごしましたが、若い頃は、今のように部屋に居ながらにして、あらゆる情報を入手できる時代ではありませんから、研究の合間に図書室に足を運び、書棚に並ぶ各雑誌の目次から自分の必要とする論文を探し、図書室のコピー機を使用して初めて論文を手にするといったように、今に比べるとずいぶん効率の悪い作業をしていたように思います。一方で、私の研究内容が化学以外の領域を含むこともあり、非水研以外、例えば周辺の流体研、金研の図書室にもよく伺いましたが、他研究所の図書室巡りは、情報収集という名目の束の間の息抜きの時でもあったことは確かです。ある研究所の図書室に伺った際、学生時代に講義を受けた名誉教授の先生にお会いし、懐かしさと驚きを感じたことを思い出します。そのような中、青葉山の化学系や機械系の図書室、そして工学分館にも何度も足を運ぶ機会があり、特に工学分館の書籍、学術雑誌の豊富さには、驚きと羨望を感じました。そのたびに、片平と青葉山の距離の遠さを痛感していたこともありましたので。

あれから数十年経過した今、情報の電子化が我々の生活の中に浸透し、インターネットの普及により、世界中のあらゆる情報を瞬時に入手できるようになりました。図書館の利用形態も大きく変わり、本学の検索システム、電子ジャーナル・ブックリスト、データベースリストを眺めると、その利便性は極めて大きく、研究に必要な情報はほぼすべて入手できるような状況にあります。結果として、昔に比べかなり近くなった工学分館にも足を運ぶことはほとんど無くなりました。また、約30年前にアメリカに留学した際、休日を問わず24時間開館している図書館を見て、日本もこのような状況になればと思っていましたが、工学分館の現在のタイムテーブルを見ますと、ほぼ同じ状況になってい





ます。さらに、学習・教育に関する蔵書も増加し、アクティブ・ラーニングのための学習空間を提供する Abelujo も含め、設備・施設も充実化され、学生たちは工学分館を自学自習の場として有効に活用しているように思います。電子ジャーナルの価格の継続的な上昇等、難しい問題もあるかとは思いますが、工学分館、そして本学付属図書館におかれましては、ぜひ現在の環境を継続、さらに発展させ、本学の学習、教育、研究活動に対してより効率的な支援をお願いいたします。一方で、ユーザーである我々は、現在の環境がかなり恵まれた環境であることを自覚して、これを最大限活用し、教育、研究の向上に努める必要があると思います。

周りの若い人たちを見ますと、タブレットを巧みに操り、論文や書籍を読んでいる光景をよく目にしますが、私自身はディスプレイを通して論文等を読むことが未だに苦手であり、電子ジャーナルからダウンロードした論文を印刷して読むことが多く、なかなか現代の情報化社会に馴染めない一人であることを最後に申し添えておきます。

